日本学術会議 Science Council of Japan

近畿地区会議ニュース

No. 26 ◆ March 2017 Kinki District Branch

平成２８年度　日本学術会議
近畿地区会議の活動について

近畿地区会議代表幹事
第１部会員　梶　　茂　樹
（京都産業大学共通教育推進機構
客員教授）

第２３期の日本学術会議が平成２６年１０月にスタートして、今期近畿地区会議もあと半年あまりを残すのみとなりました。第２２期の代表幹事を務められた橋田充先生の後を受けて、私が第２３期の代表幹事ということになりましたが、その間、十分に職責を果せたかどうか、心もとない限りです。私事ですが、平成２８年３月に京都大学を定年退職し、４月から京都産業大学に移りました。その間、事務局の方々をはじめ多くの方々のサポートのもと、ここまでやって来ることができたというのが実情です。残された日々も近畿地区会議の発展のために努力していきたいと思っております。

日本学術会議は全国を７地区に分け、会員及び連携会員をもって組織された地区会議を運営しております。第２３期の近畿地区在住の会員及び連携会員は４２１名という大世帯です。そして

会員及び連携会員の方々には、それぞれの研究機関において指導的役割を果して頂いております。地区会議運営要綱は、その目的を、第２条に「日本学術会議の諸活動を地区内の科学者等に周知徹底し、及び日本学術会議に対する意見、要望を汲み上げて日本学術会議と科学者との意思疎通を図るとともに、地域社会の学術の振興に寄与すること」と定めています。そういう意味で、地区会議は地域社会の学術・文化の振興を担う基本単位として機能する必要があります。

近畿地区会議は、地区運営協議会を毎年２月（あるいは３月）に開催し、その運営方針を審議し決定しています。平成２８年度は、学術講演会のテーマとして幾つか提案されたものの中から、京都大学を中心に精力的に進められているアフリカ研究ということで、「アフリカの進化と文化－われわれがアフリカから学ぶこと－」というタイトルで開催しました。今回のテーマにおいては、人文・社会学系と自然科学系の両方の立場からアフリカを見るということで、多彩な研究者の方々に講演をしていただきました。とりわけ京都大学総長の山極壽一先生にはお忙しいなかゴリラのビデオを交えて話をしていただけたのは嬉しい限りでした。また日本学術会議会長の大西隆先生にもご挨拶をしていただけました。場所の手配などはいつものことながら、事務局の方々をはじめ多くの方々のお手を煩わせました。関係者の皆様方には心より御礼申し上げます。講演会の内容については本号の学術講演会報告を見ていただければと思いますが、多くの参加者から、大変面白く興味深かったと賛辞をいただきましたことを付け加えさせていただきます。

平成２８年度の近畿地区会議学術講演会は、これ１回のみでしたが、もう１つ市民公開シンポジウムとして「農学の最前線－先端科学と応用技術－」を、農学委員会（川井秀一委員長）との共催という形で８月６日（土）に京都で開催しました。平成２９年度も、地区の皆様方にとって興味深いテーマを選び開催したいと思っています。このような学術講演会・シンポジウムは、近畿地区独自の学術文化懇談会との密接な連携に基づいたもので、協働体制に基づく活動によって、一般市民の方々にも日本の学術のあり方とその社会貢献の姿を広く知っていただく機会にしたいと願っています。

以上、簡単ではありますが、近畿地区会議の活動を紹介させていただきました。今後の近畿地区におきます日本学術会議の事業につきましては、ご意見、ご提案がございましたら、是非、会員、連携会員、また地区会議運営協議会委員の先生方、あるいは近畿地区会議事務局（京都大学研究推進部研究推進課内）まで、お寄せいただければと思います。皆様方のご協力を切にお願い申し上げる次第です。

多くの参加者で賑わった学術講演会

学術講演会　全体討論の様子

（左から山極総長、幸田教授、宮本名誉教授、中村研究員）

平成２８年 日本学術会議近畿地区会議学術講演会

「アフリカの進化と文化－われわれがアフリカから学ぶこと－」

実施概要

日　　時：平成 28 年 10 月 15 日（土）13 時 00 分～17 時 00 分
会　　場：京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール
主　　催：日本学術会議近畿地区会議、京都大学
後　　援：公益財団法人 日本学術協力財団

プログラム

開会挨拶
梶　　茂　樹　　日本学術会議近畿地区会議代表幹事
京都産業大学共通教育推進機構客員教授
大　西　　隆　　日本学術会議会長・豊橋技術科学大学学長・東京大学名誉教授

趣旨説明
梶　　茂　樹

講演１
「ゴリラから学んだ人類の進化」
山　極　壽　一　　京都大学総長

講演２
「アフリカの魚から学ぶ動物の社会と賢さの進化」
幸　田　正　典　　大阪市立大学大学院理学研究科教授

講演３
「20 世紀アフリカ文学の伝統」
宮　本　正　興　　大阪外国語大学名誉教授・中部大学名誉教授

講演４
「『伝統衣装』のいま－ケニア牧畜民のビーズ装飾を事例に－」
中　村　香　子　　京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員

全体討論

閉会挨拶
伊　藤　公　雄　　京都大学大学院文学研究科教授

総合司会
伊　藤　公　雄

講演の概要

アフリカは日本からは遠く離れていますが、学問的に極めて刺激的な所です。人類発祥の地であるばかりでなく、現在も様々な民族が、あるいは伝統的な様式で、あるいは極めて近代的な様式で日々の生活を営んでいます。この多様性は、文化のみならず、自然界、生物界においても同様です。その広大な大地には、砂漠や熱帯雨林だけでなく、サバンナや湖沼地帯が広がり、多様な生物界が展開しています。

本講演会では、伊藤公雄京都大学教授の総合司会の下に、自然と文化の両面からアフリカの多様性とすばらしさ、そして、その学問的研究の奥深さについて４人の方々にご専門の立場からご講演を頂きました。また、その後の全体討論では活発な議論が行われました。以下に講演の演題と要旨を示します。〔文責：梶　茂樹〕

講演１　「ゴリラから学んだ人類の進化」
　　山極　壽一　京都大学総長

19 世紀中盤に欧米人によって「発見」されたゴリラは、最初に誤ったイメージで伝えられたために、100 年以上も暴力的で邪悪な性格をしていると見なされてきました。それは、ゴリラと共通の祖先をもつ人類の祖先の姿をも誤って解釈する結果となりました。20 世紀の後半に野生のゴリラに接近して観察できるようになると、ゴリラがむしろ戦いを避けながら平和な家族生活を送っていることがわかってきました。日本の霊長類学者はその暮らしに人間家族の起源を求め、パイオニア的なフィールド調査を行いました。その試みは 1960 年代にアフリカ各地に起こった独立戦争によって中断を余儀なくされましたが、 1970 年代以降マウンテンゴリラを中心に各地で調査が進むと、人類の祖先の社会を想像する上で貴重なヒントが得られるようになりました。縄張りの欠如、対等性、食物分配、社会的な父親の創造、メスの移籍、オスによる子殺し、血縁関係にあるオスたちの共存などです。これらの研究成果を紹介しながら、人類の初期の社会像に迫りました。

講演２「アフリカの魚から学ぶ動物の社会と賢さの進化」
　　幸田　正典　大阪市立大学大学院理学研究科教授

アフリカのタンガニイカ湖（九州ほどの広さ）には、独自に進化してきたさまざまなカワスズメ科魚類が生息しています。我々はこの湖で適応放散したこれら魚類に注目し、彼らの社会

や行動を長年にわたり調査してきました。一般に脳が小さく単純で認知能力も低いと思われている魚類でも、鳥類、ほ乳類そしてサル類にも匹敵するような複雑な社会をもつことを明らかにしました。一夫一妻・一夫多妻・一妻二夫（雌が同時に２匹の夫を持つ）、さらには家族群の種類さえいます。これら多様な社会はどうやらその子育て様式と関係しています。また、このような複雑な社会を維持するには、記憶力、相手の識別力やさまざまな判断能力が必要で、魚も相当「賢い」に違いありません。最近、我々は彼らが顔でお互いを精確に識別でき、論理的思考もできることを確認しました。本講演ではこれら魚類の多様な社会と特に顔に基づく識別能力を紹介し，動物の「賢さ」の進化について考えました。

講演３「20 世紀アフリカ文学の伝統」

宮本　正興　大阪外国語大学名誉教授・中部大学名誉教授

ナイジェリアのチヌア・アチェベ（1930～2013）は、英語による処女作『部族崩壊』（1958）で、被植民地化の攻勢を前に、伝統社会の崩壊を描き、現代アフリカ小説の原型をつくりました。ケニアのグギ・ワ・ジオンゴ（1938～）は、民族語での小説『カラスの魔法医』（2004～2006）で、20 世紀のグローバル化した世界におけるアフリカの総括を試みました。アフリカと世界にとって、20 世紀の変化は急で、かつ激しいものでした。それは、戦争と革命、脱植民地化とグローバル化の世紀であり、多岐にわたる「主義・イズム」の世紀でもありました。曰く、人種主義、植民地主義、民族主義、資本主義、帝国主義、社会主義、共産主義、ファシズム、ナチズム、マルクス主義、新植民地主義、フェミニズム、パン・アフリカニズム、アフロ・セントリズム、などです。植民地経験を含めて、アフリカ文学にとって 20 世紀とは何であったか。文学への意志と作家の倫理観を支えるものは何か。アフリカ文学の歴史的使命、その文明史的意義について報告しました。

講演４「『伝統衣装』のいまーケニア牧畜民のビーズ装飾を事例にー」

中村　香子　京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員

全身を色鮮やかなビーズの装身具で飾る「マサイの戦士」の姿は、「伝統的なアフリカの民族」というイメージの代表です。しかし、この「伝統衣装」に使われているビーズが、実はチェコからの輸入品であることはあまり知られていません。東アフリカの牧畜民は、19 世紀の終わりにもたらされたビーズを用いて、わずか 100 年ほどのあいだに独特のデザインの「伝統衣装」を創り上げたのです。とくに、現金経済や学校教育が急速に普及したこの 20～30 年の期間に、彼らの装身具は驚くほど派手になりました。造花や毛糸、画鋲、ペットボトルのキャップといった意外なものをビーズと組み合わせて、さまざまな新しい装身具が、日々、新たに創られています。この輸入品のビーズは、出稼ぎや家畜の売却によって得た現金で購入されており、派手な「伝統衣装」は裏を返せば、現金経済の浸透とともに、彼らがグローバル・マーケットにおける消費者になっていった証でもあります。

本講演では、ケニアの牧畜民サンブルを事例に、彼らのビーズ装飾のデザインや意味を紹介しながら、観光業などへの参与をきっかけに、外部からの「まなざし」を意識した人びとが、いかに自文化と向き合い、「伝統」をダイナミックに創造しているのかを報告しました。

日本学術会議市民公開シンポジウム

「農学の最前線 ―先端科学と応用技術―」

実施概要

日　　時：平成 28 年 8 月 6 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分
会　　場：京都大学東一条館思修館ホール
主　　催：日本学術会議農学委員会・食料科学委員会
共　　催：京都大学大学院総合生存学館（思修館）、日本学術会議近畿地区会議
後　　援：日本学術振興会学術システム研究センター農学専門調査班

プログラム

開会挨拶
講演
１．先端科学でイネの収量はどこまで向上できるか？
　大　杉　　立　　東京大学農学生命科学研究科・特任教授
２．ゲノム科学が農学にもたらすもの ―植物ゲノムの研究と応用―
　倉　田　の　り　　農業・食品産業技術総合研究機構・理事
３．ヒトと動物の感染症　―人間社会への影響―
　甲　斐　知恵子　　東京大学医科学研究所・教授
４．ゲノム情報の利用とその改変によるカイコの遺伝子機能解明と新たな昆虫産業への展開
　嶋　田　　透　　東京大学農学生命科学研究科・教授
５．未来の車は植物で作る
　矢　野　浩　之　　京都大学生存圏研究所・教授
６．植物の反応をみる　―細胞～地球環境―
　大　政　謙　次　　日本学術会議・第２部副部長
質疑応答
閉会挨拶
総合司会
　川　井　秀　一　　京都大学総合生存学館・学館長

＊＊＊　日本学術会議近畿地区会議とは　＊＊＊

日本学術会議は、科学が文化国家の基礎であるという確信の下、行政、産業及び国民生活に科学を反映、浸透させることを目的として、昭和 24 年（1949 年）１月、内閣総理大臣の所轄の下、政府から独立して職務を行う「特別の機関」として設立されました。

職務は、以下の２つです。

１．科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること。

２．科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること。

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野の約 84 万人の科学者を内外に代表する機関であり、210 人の会員と約 2000 人の連携会員によって職務が担われています。

日本学術会議の役割は、主に（Ⅰ）政府に対する政策提言、（Ⅱ）国際的な活動、（Ⅲ）科学者間ネットワークの構築、（Ⅳ）科学の役割についての世論啓発です。

日本学術会議には、地域の科学者と意思疎通を図るとともに学術の振興に寄与することを目的として、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の７つの地域に地区会議が置かれています。これらの地区会議は、地域の求める情報に即したテーマを設定した学術講演会の開催や科学者との懇談会、地区会議ニュースの発行などを行っています。

地区会議運営協議会は、当該地区に居住する会員又は勤務地を有する会員の中から各部ごとに選出された会員１２名で構成されており、現在、近畿地区会議においては、第１部会員の梶茂樹（京都産業大学共通教育推進機構 客員教授）が代表幹事を務めています。

※「日本学術会議地区会議運営要綱」は以下のリンク先よりご覧ください（PDF 形式）。

http://www.scj.go.jp/ja/scj/kisoku/15.pdf

近畿地区会議運営協議会

代表幹事	梶　　茂　樹	（第１部）
	伊　藤　公　雄	（第１部）
	河　田　潤　一	（第１部）
	兵　藤　友　博	（第１部）
	三　成　美　保	（第１部）
	石　川　冬　木	（第２部）
	川　井　秀　一	（第２部）
	田　畑　　泉	（第２部）
	平　井　みどり	（第２部）
	東　野　輝　夫	（第３部）
	吉　田　　進	（第３部）
	橋　田　　充	（連携会員）

近畿地区会議事務局

〒６０６－８５０１
京都市左京区吉田本町
京都大学　研究推進部研究推進課内
TEL:　０７５－７５３－２０４１
FAX:　０７５－７５３－２０４２
メールアドレス
kensui.soumu@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

日本学術会議ホームページ
http://www.scj.go.jp/index.html